

---

# 最期の写真

Toporo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最期の写真

### 【コード】

N9789L

### 【作者名】

Toporo

### 【あらすじ】

2010年6月13日。

か？

聞こえる

ああ、もう空は真っ暗だ。沢山の星々が光っているの見える。

だ？

体の調子はどう

調子がいいよ。まだまだ動けそうだ。

か？

ちゃんと辿り着けそう

やってみせるわ。

この世界は僕の知らないことばかりで、楽しいよ。

周りの生徒より一回り小さな体格。内気な声。お洒落とは程遠い、短く揃えられた前髪。

クラス中が右や左や、後ろを見ている中、二つ前の席の君だけは前を向いていた。

小難しい計算式や、理解できない文章、訳のわからない説明文。

真っ黒な筈なのに、誰かの怠慢で薄汚れた黒板を君は食い入るように見ていた。

そんな君を、私はずっと見ていた。

白衣を着た先生が時計を気にして、そわそわしだすと、大抵の生徒は筆を止める。

それはもうすぐこの退屈な時間が一旦区切られて、また眠れる時間が来るから。

ほら、時計の短針が触れるその瞬間、皆はいつせいにつつぶせになった。

黒板もそのままに部屋を出て行く先生を確認することも無く、彼らは寝息を立て始めた。

それでも君と私だけは、前を向いていた。

せわしなく動く瞳で黒板を必死に写し取る君と、それを見つめる私がノートを真っ黒にして、黒板に描かれたままの抽象的な図形をすっかり描き終えた頃には、もう次の先生が授業を始めようとしている。

廊下ですれ違う君。君はとても嬉しそうな顔をしていた。

車椅子を押している先生は、退屈そうに、仏頂面で居るのに。

君は辺りをせわしなく見渡して嬉しそうに微笑んでいる。

窓の外を鳥が飛んでいたり、木の葉が風に揺られてさんざめくと君はその小さな瞳を一杯広げて、景色を追いかける。

「ねえ先生。あの鳥はなんて鳥？あの木はなんて木なの？」

君がいくら問いかけても、先生は黒板に書かれる様な出来事しか、答えてはくれない。

でも、君は凝りもせず、少しも気分を害したようなつもりも無く。まるで先ほど出てきた疑問をそのまま忘れてしまったような。そんな調子でまた窓の外を見ている。

短い廊下を通り過ぎる間ずっと君はそうしている。

私はずっと何も言わず、車椅子を押されている。

君に初めて喋ったのは、理科の授業の時。

私のノートがもう一杯になり、黒板を一文字だつて写し取ることまでできなくなつたときに、君は自分のノートを不器用に破りとると、私に突き出した。

何も言わず、私をじつと見つめて、差し出されたノートの切れ端（それはとても乱雑に破られていて、しわくちゃで、消し跡が沢山ついていた）を引つ込めようとする素振りさえ見せなかつた。

私はそのお世辞にも役に立ちそうも無いその切れ端を掴んで

「ありがとう」とつぶやいた。

すると君はすこし微笑んで、この件の間留守にしていた右手を動かして、遅れを取り戻すようにノートをまた写し始めた。

ぐしゃぐしゃの切れ端をしばらく眺めていた私は、思いつく限りのユーモラスをこめた落書きを描いた。

思えば、私が先生以外と喋ったのはそれが初めてだったかもしれない。

それから二年ほど過ぎて、君と久しぶりに同じクラスになった。

掃除の時間に立ち歩くことを許された私達は、車椅子から立ち上がり、箒を携えた。

授業の間、誰が気に留めることも無く床に散らばり続けた消しかすをチリトリに集めていると、誰かの視線がして、ふと上を見上げた。そこには君がいて、しゃがみこんでいた私の視線にあわせるように

しやがみこんで、

「君の落書き、面白かったよ」  
と言葉を発した。

それまで一度も聞いたことが無かった彼の声を聞いて、私は少し驚いて、少し泣きそうになった。

私は今まで先生以外と話したことが無かったので、自分と同じ存在が私を記憶してくれていた、ということが何故だか涙を誘った。

少し歪んだ視界をぬぐってみると、彼は少し気恥ずかしそうにそっぽを向いていた。

気が付いたら、何も気にせずしやがんだためか、私のスカートは捲くれていて、親に言われるままに着こなしていた下着が彼に見えるようになっていた。

それに気付いて、慌てて立ち上がってスカートを直すと、彼も同じように立ち上がった。

そして、さっきまでの光景を忘れたように、壁に立てかけてあったもう一つの箒を掴んで、消しかすを集め始めた。

私達はすべての授業の3分の2を終えて、少しだけ自由に出歩くことを許された。

校舎の外はいっぱいの日差しが眩しくて、私の開放感を満たすには十分すぎるくらいだった。

周りには私一人だった。生徒のほとんどはまだ校舎に残っている。

私は何故だか虚無感に襲われて、突然胸が高鳴り、誰かが恋しくなった。

誰が恋しいのか、そううつむいて考えると、ぼんやりと彼のことが浮かんでくる。

校舎に振り返って、まだ教室に居残ってノートを書き写している彼の元に歩き始めた。

廊下を歩きながら、どう理由をつけようか、彼と何を話したらいいのか、見送るべきなのではないか、とかを考えていたが、結局彼が

居る教室に着くまで、何も思いつかなかった。  
それぐらい、そわそわしていた。

戸を開けた私の目の前には、向かい合わせた机に座る彼と、彼に話しかける先生。

「君の旅立ちは、一週間後に決定したよ。」  
先生がそういつているのが、敷居の向こうからも聞こえた。はつきりと。

私はしばらく立ち尽くして、言葉の真意をやっと掴むことが出来た。私は突然怖くなって、恐ろしくなって、一秒先が真っ暗になって。開けられた戸の前で震える私に気付いた先生は、夕焼けが反射する眼鏡越しに、こちらを確認した。

それと同時に、きょとんとした表情を浮かべていた彼も、私の方を振り向いた。

私はその場にいることが許されないような気がして、戸を閉めることもせず、走り逃げた。

校庭の砂場に積み上げられた砂の山で、私は座り込んでいた。

彼が旅立つ一週間の間に、私はどうしようかを必死に考えていた。

そしてそれよりも、彼が旅立つという言葉が嘘であるように必死に願っていた。

日はもうほとんど落ちて、目にわかるほどに辺りが暗く沈んでいく。あと30分もすれば私の自由の時間は費え、また車椅子に乗せられ、部屋に戻る。

この30分を自分のやりたいように過ごすことがもつとも最善なはずなのに、私はそれもしなかった。

ただ悩んでいた。

すると、私は視線に気付いた。

くみ上げられた腕の上で涙ぐむ顔を上げると、暗闇の中にぼんやりと浮かぶ彼の顔を見つけた。

「遊ぼうよ。」

彼の言葉を聞いて、私はまた虚無感に襲われた。

私の答えを聞く前に彼は砂場の砂を集め始めて、その辺りに捨てられていた砂だらけのプリンカップに砂を詰め始めた。

姿勢を崩さず私は彼を見つめたままだった。しばらくすると彼は綺麗に形作られた砂の塊を完成させて、微笑を零した。

あの時廊下で見たのと同じ、どこまでも希望的な笑顔を零した。

私はただ、涙を零していた。

その30分間を私は、遊び費やすことに決めた。

砂の山を作っては崩し、作っては崩しを繰り返した。

彼と一緒に。

その瞬間は、先生達がつぶさに零す「幸せ」というものだったのかもしれない。

一週間はあっという間に過ぎて、私達はまた同じ教室で黒板を眺めていた。

そして、授業が終わると、いつもならそのまま出て行くはずの先生が、彼の元に歩み寄る。

それに答えるように彼も立ち上がって、先生が押す車椅子に腰掛けた。

先生は無表情のまま、車椅子と一緒に教室を立ち去る。

私は机から勢いよく立ち上がって、机につっぱしている生徒たちを押しつけて、教室の窓にへばりついた。

先生が校舎から出てきて、彼は相変わらず車椅子の上で、道なりに

進んで。

窓を開けることも許されない私は窓に掌を押し付けて、去っていく  
彼を眺め続けた。

彼が見えなくなるほんの一瞬だけ。

彼が私の方を見たような気がした。

それが本当だったのか、それに答えられたのか、わからないけど。

私は小さく右の掌を振った。

願わくば、あの時の彼の視線が二年前に私が彼を見ていたものと同じ  
であるように。

そう思うと、私を襲っていた虚無感は次第に、満足感へと変わって  
いった。

彼がくれたノートの切れ端に、その日の日時を書き込んである。

二〇〇三年、五月九日。

午後一時二十九分。

なんとか、聞こえるよ。

様。

七年間お疲れ

ありがとう、とても嬉しいよ

まだ体は動く

か？

どうだろう。なんだか体の節々が硬いんだ。

不可能

か？

何をすればいいんだい？

振り向いて写真を撮れる

か？

やってみるよ。

ああ、こんなに綺麗だったんだ。

まえ。

見た

ずっと前を向いていたから気付かなかったよ。

郷だ。

あれが君の故

ただいま。地球。

小惑星探査機はやぶさ。  
任務を終えて、二〇一〇年六月十三日。  
大気圏上で消滅。

(後書き)

最期に故郷を彼に見せてあげようとかどうして宇宙関係の人はこつ  
もロマンティックなんだろつ。  
宇宙がロマンの塊だからかな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9789/>

---

最期の写真

2010年12月27日00時31分発行